

聖書 使徒言行録2章22節～36節

22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。25 ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。26 だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。02:28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』02:29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。02:30 ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。02:31 そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。02:32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。02:33 それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。02:34 ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。02:35 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで。』02:36 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。』

説教 『十字架の死と復活の命とが何よりも大切』

◆私たちが今日一緒に読みますのは、聖霊降臨節における使徒ペテロの説教の一部であります。従って、この説教はキリスト教会最初の説教であります。そのような意味において極めて重要な箇所であります。私は今、司会者がこの箇所を朗読されるのを聞きながら、使徒ペテロはこの説教を、どのような口調で、どのような姿勢で行ったであろうかと思いました。説教ですから、当然、言葉が大事であり、その内容が大事であります。しかし、その言葉、内容をどのようなトーンで語るかということも合わせて大事であります。今日の箇所の冒頭で、ペテロは「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください」と五旬節の祭りを祝うために、それこそ世界中から集まって来た同朋に、「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください」と呼びかけているのであります。

◆そして五旬節は、過越祭から50日目の祭ですね。そして皆様ご存知のように、ペテロは、過越祭の時にイエス様が捕えられて裁きを受けている時、人々から「お前は、あの男の仲間だ」と指摘されますが、3度

も「違う」と言って、イエス様との関係を否認したのです。そして、イエス様は、祭りの最中、十字架で死刑になられるのです。聖書によりますと、ペテロをはじめとする主だった弟子たちは、恐怖と悔恨で、潜み隠れ、一步も外へ出ることができませんでした。それこそ引き籠もっておりました。そして、その後、故郷のガリラヤに戻ります。特にペテロは、一切を捨ててイエス様に従って行った人でした。そのペテロが故郷に戻ってきたのですから、同族の人たちは当然、「どうして戻って来たのか」と問うでしょう。ペテロはそれに対して、正直にその訳を言えるでしょうか。言えませんね。「墓場まで持ってゆく」という言葉があります。しかし、ペテロの場合、墓場まで持って行っても、心に平安を得ることはできません。それこそ、生きていても地獄だし、死んでも地獄ですね。つい先日まで、そのような状態であったペテロが、今、都エルサレムの真ん中で、説教しているわけです。どうして、こんなことが可能となったのでしょうか。

◆もしイエス様の甦りがなければ、そしてペテロへの顕現がなければ、恐らくペテロは、恐れと悔恨で縮こまり、潜み隠れ、一生、故郷を失って過ごす事になった事でしょう。しかし、イエス様は復活され、ペテロをはじめとする弟子たちに現れ給い、「あなたがたに平安があるように」と言われたのです。そしてペテロは今、エルサレムのど真ん中で、堂々と、確信をもって、イエス様の十字架の死の意味と復活の事実について証しをしているのであります。その姿はまるで別人であります。ペテロは今、「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください」と、都の真ん中で同胞に語りかけています。

◆ところで、この聖書という書物は、これだけ分厚さです。この聖書に記されている事柄の核心、要点は、一体何でありましょうか。この聖書全体と、今日、わたしたちが読んでおります使徒言行録の記事、使徒ペテロによりますキリスト教最初の説教の一部分とに共通しているものは一体何でしょうか。それは、罪の赦しと、復活の命だと申してよいでありましょう。今日の説教題を「十字架の死と復活の命とが何よりも大切」としましたが、「十字架の死」は「主イエス・キリストの十字架の死による、我々人間の罪の贖い、罪の赦し」という意味合いであります。主イエス・キリストにおいて示された神様の御愛のゆえに、私達が、この私が、罪の赦しと、復活の命に、与ることを許されているということでもあります。もし、このことがないならば、昔のイスラエル人であろうが、現代に生きる我々であろうが、いつの時代のどこの国の人間であろうが、平安に生き、平安の内に死ぬことはできません。父なる神様とイエス様と聖霊なる神様とが、三位一体の神様として、今も、永久に、この私と共に居まして、その善き御心を果たして下さるといのが信仰の確信であります。ペテロは、十字架の主、復活の主イエス様が、聖霊において彼を包み、彼の内に満ちて、生きて働き給う、その御力によって、語らされているのであります。語ることを得させられているのであります。ですから今やペテロには何の恐れもありません。それと同時に、どのような意味においても、自分自身を誇るというような事も全くありません。あり得ません。

◆ペテロはここで、主イエス・キリストの復活と罪の赦しを予言するものとして、25節～28節に詩編第16篇8節～11節を引用しています。詩編16篇の標題には「ミクタム。ダビデの詩。」とあります。「ミクタム」の意味には諸説があるのですが、一つは「嘆きの詩」ということです。ダビデとペテロに共通することは、両者とも、赦され難い罪を、主に、神に赦されたという経験です。そして、その赦された経験は、永遠に確かな神様の憐れみに根拠を持つものですから、永遠の命をも内包するものです。いずれにせよ、ペテロは、この詩編16篇をダビデによる主イエス・キリストの復活に関する予言と受けとめているのです。そして、ダビデもペテロも、神によって、主イエス・キリストによる憐れみによって永遠の命の幸いに与る者とされたことを心から感謝しているのであります。そしてペテロはもう一つ、34節～35節に、<ダ

ビデの詩、賛歌。>との標題の付いた詩編110篇の1節を引用しています。「主は、わたしの主にお告げになった。『わたしの右の座に着け。わたしはあなたの敵を、あなたの足台とするときまで。』」この「主は、わたしの主」における、はじめの「主」は、ヤハウエなる神様のことです。そして「わたしの主」とは、主イエス・キリストのことです。このようにペテロは、「罪の赦し」という自分の経験とダビデの経験とを合わせながら、主イエス・キリストの十字架の死と復活とを、神様の御心、御御計画として受け止めているのであります。結局この分厚い聖書が語っている事は、これをギューツと煎じ詰めれば、イエス・キリストによる罪の赦しと復活の命です。私たちは、神様の憐れみによって、恵みとして、罪の赦しと復活の命に与っているのです。これこそが、キリスト教会最初のペテロの説教の要点・核心であります。そして、今日・ここに生きている私たちも、この聖書を通して、イエス様による罪の赦しと復活の命に与る幸いを得ているのでありますから、キリスト者の幸いは、何処にもない幸いですね。

◆ところで、「あなたは、いつ死んでもよいという覚悟と、備えができていますか」などと、路傍伝道の人に聞かれるかもしれません。皆さんは、どうお答えになりますか。一般的日本人ならば、10人に2～3人は「縁起でもない」と腹を立てるでしょう。それとも「はい、できています」と答えられますか。結局、3千年前のダビデにせよ、2千年前のペテロにせよ、そして、今・ここにおります私たちにせよ、全時代の全人間の究極の問題は、罪と死の問題に帰するのであります。この問題について、わたしたちが比較的によく親しんであります「ハイデルベルク信仰問答」は、以下のような問答で始めております。この「ハイデルベルク信仰問答」は1563年にドイツのハイデルベルクで生まれた改革派教会の信仰問答書です。人間の悲惨・救い・感謝の3部からなっており、全体で129問答からなっています。その第1問答はこうです。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答え わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方は御自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。また、天にいますわたしの父の御旨でなければ、髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜び、またそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです。(吉田隆訳)

今日わたしは、使徒ペテロさんの説教を聞きながら、このハイデルベルク信仰問答の第1問答を思い出しました。129問答からなるこの問答の構成は、人間の悲惨・救い・感謝の3部です。見事な構成ですね。

◆後に、復活の主イエス様の直撃を受けてキリスト者となった使徒パウロは、「復活の章」と言われるコリント前書15章1節～10節においてこのように言っております。「15:01 兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音に他なりません。15:02 どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じた事自体が、無駄になってしまうでしょう。15:03 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、15:04 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、15:05 ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。15:06 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既

に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。15:07 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、08 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。15:09 わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。10 神の恵みによって今日のわたしがいるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」と。このように語ります使徒パウロも、どのような事であろうと赦され難い罪を犯した人間であります。そのパウロが、「神の恵みによって今日のわたしがいるのです。と言っております。いずれにせよ、ペテロもパウロも今から2000年も前の人です。そして、ペテロが引用していますダビデについては、紀元前1000年の人です。ですから、わたしたちは、また昔話を聞かされているように思うかもしれませんが、これは、私たち自身の事実であります。私たちも、赦され難い罪を赦されて、復活の命に与っているのであります。罪と死に関する限り、昔も今もないのであります。

◆皆さんもよくご存知のあのマルタとマリアとラザロの姉弟の話がヨハネによる福音書11章にあります。<11:17 さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。11:18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。11:19 マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来っていた。11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎へに行ったが、マリアは家の中に座っていた。11:21 マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。11:22 しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」11:23 イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、11:24 マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。11:25 イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」11:27 マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じております。」>この後、死んで既に4日も経っていたラザロをイエス様は甦らされます。因みに「ラザロ」という名前は「神は助けられた」という意味です。イエス様は「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」と言われます。私達イエス様を信じる者は、死んでも死なない命、そして決して死ぬことのない命に、今・ここで与っているのです。何という幸いでしょうか。この6月22日に近畿中会婦人部の修養会があり、講演の依頼を受けております。主題は『聖書に見る信仰の継承』～伝えでやあるべき 御救いのかしこさ～ですが、信仰の継承、福音の伝道は、この私自身が、信仰に生き切る以外にないと思います。生き切ると言えば、力みが入りますが、如何にしても応える術もない、罪の赦しと復活の恵みの福音を、感謝して生きる。そのことがなければ、ほかに何があっても空しいでしょう。すべての根底に罪の赦しと復活の恵みへの感謝があるならば、必ず継承されるでしょう。必ず伝わるでしょう。そう上で、ありとあらゆる工夫と努力をいたしましょう。

◆お祈りいたします。憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたは、私達の救いの為に御独り子イエス様をさえ十字架に渡すことを惜しまれませんでした。今、改めて、あなたの御愛の限りなさを覚え、心から感謝いたします。そのイエス様が甦られ、私たちに罪の赦しと復活の命を与えて下さる事を覚え、心から感謝いたします。どうか、わたしたちの生活の全てが、このあなたの恵みの証しであらせて下さい。この祈り、主イエス様の御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。